

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

令和元年八月十日(土曜日) 午後五時開演

演目解説 佐々木香織 (石川工業高等専門学校准教授)

狂言 鬼瓦 (おにがわら)

長い在京のかがあつて訴訟悉くかない、安堵の御教書を得て近日国へ帰ることになった何某が、太郎冠者を伴いお礼参りに因幡堂の薬師如来に出掛けます。国元にも薬師を勧請して日参したい、については大工に指図するためお堂の作りを覚えておこうと見回る内に、ふと空に黒い異形なものを見つけました。鬼瓦です。これが国元の女房殿の醜貌にそっくりとかで思わず落涙しますが、やがて再会できると気を取り直して笑い留めになります。

能 養老 (ようろう)

美濃の国本巢の郡に不思議な泉が発見されたのは雄略天皇の御代のことです。さっそく勅使(ワキ・ワキツレ)が派遣され、養老の泉のいわれを尋ねます。滝のほとりに現れた親子(前シテ・ツレ)は、この水を山仕事の帰りに息子が見つけ、老いた父母に与えて老いを養う薬とし、おかげで心清らかに齢も延びたと穏やかに語ります。親子は滝壺近くの霊泉に勅使を案内して(養老の滝と養老の泉は別物です)、帝の治世を称え帝の寿命が尽きないよう薬の水を捧げることにします。水の奇瑞、酒の仙徳に思いをめぐらし、袖を濡らして水を汲む老人が、水鏡に映る姿の若やぎを喜んだ後、天上からは光と花と音楽が降り注ぎ、滝の響きも清澄さを増します(中入)。やがて男体の山の神(後シテ)が颯爽と影向し(前シテの老人と後シテの山の神は別人です)、神仏は御代を守り衆生を救うのだといって、諸天の来御に耳を澄ませ神舞を舞います。山の井の水は千年の松の緑を映し、滔々として尽きません。山の神は善き御代の万歳の栄えを祝福して帰ります。

西村 聡 (金沢大学人間社会研究域教授)

前シテ(老翁) 尉髪をつけ、小尉の面をかける。小格子厚板を着附に着、白大口をはき、上に水衣を着て、腰帯をしめる。(持物、杖、扇)
後シテ(山神) 黒垂をつけ、色鉢巻をしめ、透冠をいたただき邯鄲男の面をかける。厚板を着付に着、白大口をはき、上に袷法被を着て、腰帯をしめる。(持物、扇)

(午後七時頃終了予定)